

## 気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館の存在意義、込められた思い

宮城県 気仙沼市（気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館）

### 1. はじめに

気仙沼市は、宮城県の北東端に位置し、東は太平洋に面し、南は宮城県本吉郡南三陸町、西は岩手県一関市及び宮城県登米市、北は岩手県陸前高田市に接している。

太平洋に面した沿岸域は、半島や複雑な入り江など、変化に富んだリアス海岸を形成し、気仙沼湾は湾口に大島を抱き、四季静穏な天然の良港となり基幹産業として水産業が発展するとともに、海の幸などを求め観光で訪れる人も多く、賑やかな交流あるまちであった。

平成 23（2011）年 3 月 11 日、午後 2 時 46 分頃、三陸沖を震源とするマグニチュード 9.0 の東北地方太平洋沖地震（災害全体を東日本大震災と称する）が発生した。

この地震に伴う大津波と、津波で浮遊し破壊された重油タンクから流出した油等による大規模な火災は一昼夜では収まらず、一旦火が収まっても再発火するなど、鎮火報が出るまでには約 2 週間を要した。まちは以前とは様相を変え、生業や生活に大きな影響を及ぼした。震災前（2 月末時点）の当市人口 74,247 人のうち、食料を求める方も含めた最多時の避難者数は約 2 万人を数える状況であり、人々は助け合い、一つひとつ困難を乗り越えながら、復興の途を歩んできた。

そのような中、市は将来にわたり震災の記憶と教訓を伝え、警鐘を鳴らし続ける「目に見える証」として活用し、市が目指す「津波死ゼロのまちづくり」に寄与することを目的に、「気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館（以下「震災遺構・伝承館」という。）」を東日本大震災から 9 年を迎える 2019 年 3 月 10 日にオープンした。

震災遺構の保存・活用に関しては、伝える内容・伝え方、また犠牲となられた方への追悼の思いや、ご遺族への配慮が欠かせないことから、多くの機会において丁寧な検討が重ねられた。

### 2. 気仙沼市東日本大震災伝承検討会議

当検討会議は、平成 25 年 11 月から平成 26 年 3 月まで 3 回にわたり、市における震災伝承のあり方に関して、震災遺構ありきではなく「伝えるとは何か」「保存とは何か」といった本質的な問題を、震災の伝承に関する活動を行っている各委員とともに意見を交わし、市として、震災の記憶と教訓をいかに後世へまた全国・全世界へ伝えていくかの考え方を取りまとめた。

#### （1）震災伝承の意義について

ア 本市震災復興の基本理念（抜粋）

- ・ 二度と繰り返さないこの悲劇

- ・ 自然に対する畏怖、畏敬の念
- イ 本市震災復興の目標（抜粋）
  - ・ 津波死ゼロのまちづくり
- ウ 震災伝承の意義
  - ・ 追悼と鎮魂・犠牲を繰り返さない誓い
  - ・ 災害に強いまちづくり・将来世代への伝承
  - ・ 沿岸部に暮らす全国・全世界の人々への伝え

## （２）震災伝承における震災遺構について（意見抜粋）

- ・ 震災の記憶や教訓を伝承するうえで、被災した場所に被災構造物等が存在することは、海との地理的な位置関係を含め、それを見る者の視覚に直接訴えるものであり、その効果は大きい。
- ・ 保存にあたっては、その目的を明確にすることが必要である。教育目的なのか、観光資源か、または学術、研究対象か、文化財か。目的の明確化により、見せ方やプロモーションも異なってくる。
- ・ また、他地域とは異なる気仙沼の被災の特徴を表現できるものが望ましく、被災前の当該地域の人々の生活痕や歴史、生活空間まで遺せるよう工夫が必要である。
- ・ 遺構整備後においては、多くの市内外の方々にしっかり見ていただき、所期の目的を達成する方策・仕掛けづくりが必要である。

「震災遺構候補」として気仙沼向洋高校旧校舎を含む被災構造物 4 件、岩井崎周辺を含む自然物 4 件を挙げ、同報告書の「震災遺構（被災構造物）に関する考察」では、「被災構造物の遺構については、復旧により解体が進み、ふさわしいものがなくなっていく中、4 施設を候補としたが、今後の復旧復興工事との兼ね合いから「旧気仙沼向洋高校」を候補とする可能性がある。しかしながら、校舎一つを遺して遺構とするのではなく、被災した地域の歴史や生活を踏まえ位置付けを明確化することが大切であり、また、保存・維持費用確保策の検討及び市全体としての震災伝承につなぐ工夫が必要と考える。」と示されている。

### 3. 気仙沼市東日本大震災遺構検討会議

当検討会議では、平成 26 年度にまとめられた「気仙沼市東日本大震災伝承検討会議報告書」を踏まえ、震災遺構の候補を気仙沼向洋高校旧校舎とし、保存整備の意義として次の事項を重視した。

- ・ 東日本大震災の記憶と教訓を伝承する場
- ・ 防災・減災教育の拠点

- ・ 気仙沼の歴史や地域性を伝える場

また、「旧気仙沼向洋高校」の保存のあり方については、次のようにまとめている。

- ・ 東日本大震災の記憶と教訓の伝承と防災、減災教育の中核拠点として保存する。
- ・ 震災遺構の特性を活かし、内部の公開活用を前提とする保存を行う。
- ・ ありのままの姿を現状保存する。
- ・ 震災遺構の価値が保たれる最大の範囲を現状保存する。
- ・ 過大な財政負担とならないよう総合的視点から方針決定を行う。
- ・ 安全性を重視した保存整備を行う。

公開活用の基本方針は、次のようにまとめている。

- ・ 東日本大震災の記憶と教訓の伝承と防災・減災教育の中核として内部を公開し、活用につなげる。
- ・ 東日本大震災の教訓と“海と生きる”気仙沼を伝える。
- ・ 全国からの来訪者に生きた防災・減災教育のきっかけを与える。
- ・ 防災・減災教育及び展示物等を展開する施設を整備する。
- ・ 大学等の研究機関と連携し、より効果的な活用を展開する。
- ・ 避難計画策定に基づく公開活用とする。
- ・ 事業の継続性を重視する。

これ以外に、公開活用における機能、防災・減災教育の取り組み、管理運営のあり方、周辺施設との連携や地域における役割等の基本的な考え方がまとめられた。また、具体化に向けては今後さらなる協議・検討を継続して実施していく方向性も示された。

#### 4. 気仙沼市岩井崎プロムナードセンター整備検討会議

岩井崎プロムナードセンターとは、岩井崎地区にあった体験型の学習施設で、磯辺体験、潮吹き岩実験模型や塩田ジオラマ、魚の骨格模型、映像シアター等が整備された岩井崎周辺の自然や歴史を学べる施設であったが、東日本大震災によって全壊し、利用不可能になった。災害復旧事業において元の場所への再建も可能であったが、市は震災遺構に付随し、効果的に記念館として設けるという方針で地元とも調整が図られ、「伝承館」としての整備が行われることとなった。

当検討会議は、震災遺構に隣接して資料館機能を有するとともに、防災・減災教育の拠点として、施設の配置や内部の諸室、震災の記憶と教訓を伝えるための映像・写真等の展示、及び施設の設計及び防災・減災教育プログラム実施運営方針等に反映させることを目的とした検討を進めた。

#### 5. 「伝承館」の展示理念・展示基本方針及び展示テーマ

以下、当館の展示理念・展示基本方針・展示テーマ等の説明を記す。

### (1) 伝承館展示理念

将来にわたり東日本大震災の記憶と教訓を伝え、警鐘を鳴らし続けるとともに、訪れる人に防災・減災の大切さを訴える。一方で、度々津波に襲われ多くの被害を被ってきた歴史事実がありつつ、海からの大いなる恵みを得てきた気仙沼の海との関わりを表現し、自然と共に生きること、そして命の大切さを考えるきっかけを育むものとする。

### (2) 伝承館展示基本方針

- ・ 震災遺構（気仙沼向洋高校旧校舎等）が持つ本物のインパクト（津波の破壊力・被害の事実）を活かす展示とする。
- ・ 被災したまちや人々の様子、そこにあったそれぞれのストーリーを表現し、見る者が自分に置き換えて考えることができる展示（能動性、当事者性を重視）とする。
- ・ 災害ボランティアや米軍トモダチ作戦など国内外からの支援を紹介し、感謝の念を伝える展示とする。
- ・ なぜ津波が起こるのか、そのメカニズムを伝えるとともに、市が目指す「津波死ゼロのまちづくり」を伝えるための展示とする。
- ・ 市の観念は海にある。理念を越えた観念がメッセージ化した「海と生きる」を標榜し復興を成し遂げようとする気仙沼の姿を伝える展示とする。

### (3) 伝承館展示テーマ

東日本大震災という未曾有の大災害を経て、この経験を後世に残し活かすべく過去から学び、未来へと繋がる展示内容にする。津波の脅威と爪痕を深く胸に刻み、悲劇を繰り返さないために、以下の視点からアプローチする。

- ・ 地震・津波の脅威と爪痕
- ・ 救助と行方不明者の捜索
- ・ 避難所の様子と各種支援
- ・ 応急仮設住宅での生活
- ・ 被災者の思い～伝えたいこと、伝えるべきこと～
- ・ 被災の記録、復旧・復興の歩み
- ・ 地震・津波の歴史

## 6. 震災遺構・伝承館の展示構成と各ゾーンの考え方

「3.11」地震発生後にまちを襲った津波、その脅威は想像を絶し、まちに壊滅的な被害をもたらした。

伝承館映像シアターでは津波の威力・津波の恐ろしさを認識させる。

展示室Aでは、被災直後の気仙沼向洋高校及び周辺地区の様子を写真で展示し、津波の残した爪痕を浮き彫りする。

震災遺構は、被災した「ありのままの姿」で現状保存し公開活用する。

展示室Bでは、やっとの思いで逃げ延びた被災者の目の前に映った市内各地の壊滅的なふるさとの姿と救助・捜索を行う人々の懸命な姿などを写真で伝える。

最後に、被災者の想いとして被災者をはじめとする関係者の想いや証言などを伝える。

#### (1) 映像シアター展示内容

震災前の様子（向洋高校含む）→地震発生→津波襲来（火災含む）→破壊されたまち→救助（自衛隊、消防、警察等）を合わせて放映する（写真1）。

#### (2) 展示室A（通路展示）津波の脅威と爪痕Ⅰ

震災遺構に入る直前に、震災直後の向洋高校及び周辺地区の変わり果てた姿を展示する（写真2）。

#### (3) 震災遺構（気仙沼向洋高校旧校舎）

本物であること、現場であることを活かして、被災した「ありのままの姿」を見てもらう（写真3）。各震災当日の生徒たちの動きと、津波が押し寄せるなか屋上へ避難した教員、工事関係者約45人のことについても解説板等などを使用し伝える。



写真1



写真2



写真3

#### (4) 展示室B

##### ① 津波の脅威と爪痕Ⅱ

被災当日から数日間の市内各地の様子、津波火災の様子、被災直後の自宅付近をみて立ちつくす様子などを伝える。

##### ② 救助と行方不明者の捜索

自衛隊を中心に警察、消防隊、消防団員の懸命な救助活動と、行方不明者の懸命な捜索活動の様子を伝える。

## ③ 避難所の様子と各種支援

避難所の生活は簡易な間仕切りだけで不便が多く、故に避難者は力を合わせて乗り越えてきた。悲しみに堪えながら避難所で懸命に生活する人々の姿、各種支援やボランティア、アメリカ軍による「トモダチ作戦」等の様子とともに、それに対する感謝の念を伝える。

## ④ 応急仮設住宅の生活

我が家を失ってしまった被災者は、決して広いとは言えない応急仮設住宅での暮らしを余儀なくされた。最も多いときで8,288人が暮らした仮設住宅の生活等を展示する。

## (5) 講話室

震災によって多くの大切なものを奪われた被災者が、その記憶と教訓を未来の守るべき命のため、当事者の想いとして、決して他人事ではないことを伝え、前を向いて生きている人々の姿を映像で紹介する。

## (6) 展示コーナー、図書コーナー

地元新聞社から寄贈された「南気仙沼駅付近から亀山（大島）を望む」復興の歩みの定点観測パノラマ写真を展示及び、「海と生きる」をテーマに、気仙沼の海、人、生業がイメージできる写真を展示する。

東北大学災害科学国際研究所今村文彦教授提供の「東北地方太平洋沖地震による津波の発生と挙動・気仙沼市周辺での津波の挙動」をデジタルサイネージで再生する。

## 7. 気仙沼市東日本大震災遺構保存活用計画

市は、気仙沼市東日本大震災伝承検討会議、気仙沼市東日本大震災遺構検討会議を踏まえ、平成29年9月に気仙沼市東日本大震災遺構保存活用の方針を決定した。

震災遺構検討会議では南校舎のみの保存としていたが、平成28年12月に市観光課等が行った一般公開ツアー（全国から135人参加）時のアンケートで、「そのまま保存するのが一番良い」という意見が最も多く、印象に残った場所についても「北校舎と実習棟の間の車が折り重なっているところ」が一番多く寄せられた。この結果を踏まえ、平成29年1月に保存範囲を北校舎等含む校舎全体とする方針を市議会や関係会議で説明し理解を得たことから、南校舎、北校舎、総合実習棟、生徒会館、屋内運動場の5棟を震災遺構として保存かつ、一部公開し、東日本大震災発災の記憶と教訓を未来へ、そして今後同様の災害の恐れのある全国・全世界の人々へ伝えるための防災・減災教育の拠点として整備することとした。

## 8. 震災遺構・伝承館管理運営

管理運営方式は、地方自治法に基づく指定管理者制度を導入し、当初は市職員を専任館長として配置した。現在は震災当時、市防災担当のトップで指揮を執っていた元市職員が館長の任についている。

運営は「業務分割方式」を採用し、入館料及び研修室等使用料は市の収入とする「収受代行制」としている。

年間の推定入館者は重回帰分析により1年目75,000人、2年目58,000人とした。当初、目標の入館者数を達成することは難しいと、入り込み数を不安視する声もあったが、被災地であり、多くの支援を受けてきた本市が震災遺構・伝承館を有することは責務であり、同施設が被災リスクの高い地域の方や将来世代に津波の恐ろしさを伝え、防災教育を提供する場として価値ある施設と認められたと推測されるが、1年目は国内外問わず家族連れや企業研修等の団体のお客様87,328人が来館した。

## 9. 震災遺構・伝承館見学の見どころ

当館では、まず平成23年3月11日に本市で何が起きたかを映像シアターで津波の映像を13分間視聴し、その後、震災遺構である向洋高校旧校舎に入ると光景が一変する。津波によって破壊された校舎が当時のまま残され、今でもがれきが散乱している。3階には津波で流されてきて横転している車や、500メートル先にあった松の木、4階の教室には津波の到達地点と言われるレターケースの錆びた部分、そして屋上には生徒約170人が避難した階上中学校までの経路図、すぐ足元まで津波が迫った写真、学校に残った教職員等45人が最終的に避難した場所等が展示されている。西側の校舎の外には折り重なった車5台の車が、映像だけでは感じられない津波の凄まじさを伝えている。そして伝承館に戻り講話室で被災者の想いが語られるビデオを3本（10日遅れの階上中学校の卒業式の答辞、津波で奥さんを亡くした男性のコメント、夫と子どもをなくした女性のコメント）を見ていただき、当たり前前の生活がいかに大切かを気付かせてくれる。

見学後、来館者自身が「感じたこと・伝えたいこと」を付箋に自由に書くスペースを設けている。ただ「すごい」「怖い」で終わらせるメッセージは一つもなく、自分自身の震災や私生活に対する思いが表現できるとして、12月末までに9,000枚を越えるメッセージが残された。付箋には「津波の非情さがとても伝わり、この震災は絶対に忘れてはならないと思った」「この震災を世界中の人々に知ってほしい」「3.11を改めて実感できる場所」「自分の悩みがちっぽけなことだなと思った」など震災の教訓や生きていることへの感謝のメッセージが多く見受けられる。

## 10. けせんぬま震災伝承ネットワーク

けせんぬま震災伝承ネットワーク（以下「伝承ネットワーク」という。）は、市内で東日

本大震災の伝承活動や防災・減災活動を行っている個人及び団体が連携を図り、将来にわたり東日本大震災の記憶と教訓を伝え、防災力の高い地域づくりに資することを目的とし、震災遺構・伝承館を拠点に防災・減災教育活動と人材育成を行う団体である。

構成団体は次の通り。

- ・ 階上地域まちづくり振興協議会語り部部会
- ・ (一社) ボランティアステーション in 気仙沼
- ・ (一社) 気仙沼観光コンベンション協会
- ・ 気仙沼防災教育推進委員会

## 11. 語り部ガイド

震災遺構・伝承館の語り部ガイドは、伝承ネットワークと連携をしながら、震災遺構・伝承館を案内し、語り部自身の体験や教訓を語りかけることで、見た人の心に残り、防災意識の向上に繋がるよう努めている。語り部一人で20人まで対応している。

また、伝承ネットワークでは、地元中高生の語り部の育成にも力を入れており、現在約80人の生徒が語り部ガイドとして、修学旅行生など国内外のお客様に対して震災の教訓を自分の言葉で分かりやすく丁寧に説明している（写真4）。



写真4

## 12. 震災遺構・伝承館の来館状況

オープン当初の主な来館者は、県外からの観光客で個人や家族連れで来館される方が多く、最寄り駅からの交通アクセスが不便なこともあり、ほとんどが自家用車またはレンタカーを利用して来館している。団体のお客様も多く、教育関連の修学旅行や震災学習、県内外の各企業の各種研修視察、公民館事業等で来館するケースもある。

令和2年度は、コロナ禍の緊急事態宣言に伴い4月6日から5月31日まで休館したが、この間にコロナ対策にしっかりと取り組み、お客様をお迎えする準備に万端を期している。6月以降の団体は、移動する際の密を避けるためにバス利用を中止したため、キャンセルが相次いだ。しかし、9月以降は、修学旅行の行き先を関東、関西方面から東北方面に変更する学校が多い。当館は各学校及び旅行代理店が下見を行った結果、新型コロナウイルス感染症予防対策を徹底している施設と認められ、震災・防災学習の拠点として修学旅行の行き先に選んでいただいております。来館する生徒の大半が、語り部の話や旧校舎内の破壊された教室を間近でみることで、津波の脅威を肌で感じている。

その後もコロナの感染再拡大の影響を受け、来館者数は少なかったが、緊急事態宣言の

解除に伴い、現時点では多くの修学旅行等により来訪いただいている。

### 13. おわりに

震災遺構・伝承館は東日本大震災の記憶と教訓を伝え、将来にわたり警鐘を鳴らし続ける「目に見える証」であり、「3. 11 伝承ロード」として他の伝承施設と連携しながら、防災の学び・備えの発信を続け、震災を風化させず、後世に伝え続けていく。そして、防災・減災教育の拠点としての機能を持ち、多くの方に見て、聞いて、感じて、一人ひとりの防災・減災意識の向上が図られるよう努め、「未来の減災社会」づくりに寄与していく。

#### 【参考文献】

- 1) 「気仙沼市東日本大震災伝承検討会議報告書」平成 26 年 5 月
- 2) 「気仙沼市東日本大震災遺構検討会議報告書」平成 27 年 3 月
- 3) 「岩井崎プロムナードセンター展示基本計画書」平成 28 年 10 月